

がその中位ゾーンに集中している。オ3の都市機能整備係因子軸上では鳥取市は松江市等と並んでやはり特色のない中位ゾーンに位置し、このゾーンに属する都市はさきわめて多い。(この軸上で最高位は副都帯広である。)オ4の因子である文化・サービス集積係因子でみると鳥取市は米子・会津若松など並んで比較的高位に位置している。(この因子で最高位は別府・松山である。別府については観光サービス機能の集積性が高いためである。松山は文化・サービス両面の高い集積性起因すると思われる。)

最後に上述のようにして求められた各因子得点(対象4都市について計算されている)を利用してこれをクラスター分析に入力して各都市の類型化を行った。その際「近接度」の尺度として「ユークリッド距離」を用いた。分析の結果、さきわめて強い類似性があると判断されたものを「強類似集団」、弱い類似性があると判断されたものを「弱類似集団」として分類し、両集団の弱い結びつきの形態を矢印で表わした(表-2参照)。なお強類似集団の内部にも特に強い類似性の見いだされる小集団群を「——」の印で示してある。この結果より鳥取市は上述した4因子の特性を総合的に評価した場合、徳山・土浦との類似性が高く、次いで松江・大垣・熊谷のグループとも類似性が高く、これらの都市群で一つの共通した特性をもつグループを構成していることがわかる。その特徴を概観すれば、総じて政治・経済・流通・文化・サービス面の都市機能の集積はかなり高いが、人口や産業の伸びなどの成長性はいま大きくない都市群であるといえよう。また人口規模が10~15万程度で同程度でありながら都市特性とかなり異にする都市群の存在も明確になった。なお人口規模がこの範囲にありしかも県庁所在地である都市は鳥取市の他に松江・山形・津の該当するもののうち鳥取市と松江市は上述のようにかなり類似した特性を呈する。一方山形・津の両市は鳥取・松山都市群と異なるといえる性格を異にしていることが読みとれる。以下ではこの着眼点を数えんして全国の都市のうち「県庁所在地」の都市群を対象として上記と同様の分析を行なう。

2) 県庁所在地の都市の分析

ここでいう「県庁所在地」には「道庁所在地」の札幌市が含まれるが東京都・大阪市は除外する。ただし京都市は含めて考える。東京・大阪を除くのはこの2都市はその地域活動力・形態・規模などで他の県庁所在地都市と比べて特異な特徴を有していると考えられるので、統計解析上同一母集団としてみなすことの妥当でない判断したためである。分析に当たって取り上げた対象県庁の先の方針と同様77対象であり、基本的には表-1の指標群とかわりはない。ただし県庁所在地都市の分析の場合、対象都市の人口規模にかかわらずのバラツキがあるので「数量・数」の代わりに人口で除した「標準化値」を採用して対象をいくつかある。分析手法・手順などは先の分析と同様である。ただし試行錯誤の結果今度はフオネマックス回転法が最も妥当であることがわかった。その結果4つの因子が抽出された。すなわち①経済力因子、

②都市機能集積係因子、③産業構造因子、④都市成長係因子の以上4因子である。次に上で求められた因子得点を入力してクラスター分析を行なった結果、

表-3に示すような都市の分類を得た。鳥取市はやはり松江市と同一グループに属するもののこれにはさきほど述べた通りである。その特徴は大きく、経済力・自給力・低い都市機能集積性は比較的高いといえる。

3. おわりに

詳細は講演時に説明する。

表-2 対象都市の分類(人口10~15万人の地方中核都市について)

強類似集団	弱類似集団
④ 新庄・八代・川西・平治・春日部・上尾・習志野 石巻・秦野・新居浜・延岡・都城・八代・富士宮・鈴鹿・若国・防府 小山・瀬戸・松原・尾道・上越・会津若松・山口・今治・伊勢・米子・桐生・土田・松山・安城 徳山・鳥取・土浦・松江・大垣・熊谷 別府・大和	小牧・帯広 厚木・津

表-3 対象都市の分類(県庁所在地都市について)

強類似集団	弱類似集団	単独	孤立
鳥取・松江・佐賀	浦和・千葉・奈良	→ 横浜	
秋田・山形・津・宮崎・長野・福島・青森	→ 山口・大津		
甲府・福井・徳島・富山・前橋	→ 盛岡		
高知・高松・金沢・熊本・岡山・鹿児島	→ 仙台・広島		
新潟・甲府・松山・大分・長崎・和歌山	→ 水戸		
岐阜・静岡	福岡・札幌		
	京都・神戸	→ 名古屋	